

サッカーの全国高校選手権第5日が行われ、本県代表の長崎総合科学大付は昨夏の全国高校総体王者、流通経大柏(千葉)に0-3で

敗れ、初の4強入りはならなかった。【2面に関連記事】前回準優勝の前橋育英(群馬)は米子北鳥取に3-0で快勝。矢板中央(栃木)は日本文理(新潟)に1-0で競り勝った。上田西(長野)は明秀学園日立(茨城)を3-2で破った。長崎総合科学大付は粘り強い守備で前半を0-0で折り返したが、後半4分を立て続けに失点。その後はカウンターから果敢にゴールに迫ったが得点には結び付かず、終了間際に3点目を決められた。第6日は6日、同市の埼玉スタジアムで流通経大柏-矢板中央、上田西-前橋育英の準決勝2試合を実施する。(湯村高大)

長崎総合科学大付 4強ならず

▽進々決勝
流通経大 柏 3(0)0 長崎総合科学大付 千葉

【評】長崎総合科学大付はボールを支配される時間帯が長く、後半序盤に2失点。その後も後半に回り、流れをつかめなかった。長崎総合科学大付は前線からのプレスと4バックを中心とした組織的な守備で前半を無失点で切り抜けたが、後半にサイド攻撃やセットプレーから崩され、終了間際にダメ押し3点目を決められた。攻めてはカウンターやロングスロー、CKなどからゴールを果敢に狙ったが、いずれも決定力を欠いた。流通経大柏は前半、長崎大付の守備網を突破できず攻めあぐねたが、後半開始早々にロングスローのこぼれ球を押し込んで先制。6分後に追加点を挙げ、主導権を握った。今大会無失点の堅守も崩れなかった。

流経大柏に0-3 昨夏の雪辱果たせず



【準々決勝、長崎総合科学大付-流通経大柏】後半39分、長崎総合科学大付のMF荒木(左から2人目)が浦和駒場スタジアム(濱崎武撮影)で体勢を崩しながらもシュートを放つ



【準々決勝、長崎総合科学大付-流通経大柏】前半23分、長崎総合科学大付のDF田中がクリアする(濱崎武撮影)

相手に揺さぶられ後半崩れる

前回覇者を破った長崎総合科学大付の快進撃は、準々決勝で止まった。昨夏の全国高校総体王者の流通経大柏(千葉)に0-3。夏も4強入りを阻まれた相手に、雪辱は果たせなかった。

だが、敵将の本田監督は「後半勝負」と決めていた。4分にロングスローから先制点を献上。ボールを奪うと逆サイドに展開する攻めに揺さぶられ、10分に2点目も失った。試合終了間際にダメ押し3点目を、試合が進むにつれ、勢いに乗る相手止められなかった。

ここでチームを救ったのは8強という新たな歴史を刻んだ記憶に残るチームだった。(中島崇雄)

ロッカー ルーム

DF嶋中は「流経には負けたくない」と言葉に悔しさをにじませた。

前半は互角だった。相手の2トップを嶋中、DF諸氏がマーク。競り合いで負けずに長所を出させ



「頑張れ」最後まで熱い声援

選手たちに熱い声援を送る長崎総合科学大付のファンたち(濱崎武撮影)

○：長崎総合科学大付側のスタンドには部員、保護者OBらが駆けつけ、好機を迎えるたびに大歓声。試合は相手ペースで進んだが、おそろいのメガホンで「いけいけ」「頑張れ」と最後まで熱い声援を送り続けた。流通経大柏は、昨夏の全国高校総体準々決勝で敗れた相手。前主将の薬真寺孝弥さん(駒大)は「厳しい戦いになると思うが、組織力を生かして勝ってほしい」とエールを送り、100人を超す部員の応援団長を務めた3年生の上間は「リベンジを」と力を込めた。

試合後、涙を流しながら応援席に一礼する選手たちを温かい拍手でねぎらった。サッカー部保護者会の田中正二会長は「選手みんなの必死さが伝わる試合だった。こんなに感動する経験させてもらって、感謝しかない」とお礼の言葉を口にした。(岩佐誠太)

ひと言

- ◆小嶺忠敏監督 ある程度戦えるチームができた。流通経大柏は個々の能力が高い。その差は否めない。どう埋めるかが勝負だったが、力不足だった。
- ◆MF中村聖鷹(3年) トップ下に入った。(安藤) 瑞季のためにも勝ちたかった。大学でもサッカーを続ける。全ての点に絡める選手になりたい。
- ◆MF岩本連太(3年) 安藤を次の試合に出させてやれず悔しい。うまくチャンスにつなげられなかった。大学でも競技を続けてレベルアップしたい。
- ◆GK湊大昂(3年) (全国高校総体の)リベンジができずに悔しい。3失点という結果に、力のなさを感じた。満足はしていないが、3年間の集大成は出し切れた。
- ◆DF諸石一砂(3年) 前半は無失点だったが、後半は自分たちの甘さが出てしまった。後輩には借りを返してほしい。濃い3年間を過ごすことができた。
- ◆DF小川貴之(3年) ボールを持ったら焦り、つなぐべきところでつなげなかった。最初の失点後、みんなの気持ちを落ち着かせようとしたが、難しかった。
- ◆MF武井佑介(3年) シュートで終わらず、リズムが悪かった。コミュニケーションを取りながら修正しようとしたが、予測や判断は相手がお上だった。
- ◆MF別府尊至(3年) 球際の部分ではやれていたが、ボールを持ったら寄せが早く、自由にさせてもらえなかった。一瞬の差が勝負を決めてしまった。
- ◆FW西原先毅(3年) 相手DF関川に対して前半は体を当てて競っていたが、後半は足が止まった。プレスが早くパスコースが限られた。
- ◆DF柏木澤弥(2年) ディングで勝たないといけないかった。ただ、手応えもつかめた。来年は今年以上の結果を残せるように頑張りたい。

幕で援席 安藤選手 エース大付総長

悔しさ胸 Jで飛躍誓う

『世代最強FW』の日本一

への挑戦は、応援席で幕を閉じた。5日にさいたま市の浦和駒場スタジアムなどで行われた全国高校サッカー選手権準々決勝。長崎総合科学大付属のエースストライカー安藤瑞季選手(18)は累積警告で出場できなかった。故郷の自分を離れ、長崎で夢を追った3年間。「悔しいが、思い残すことはない」と、懸命に戦ったチームメイトへの感謝を口にした。

3歳上の兄、翼さん(21)が小嶺忠敏監督(72)の指導を求めて長総大付高に進み、名将の下で力を付けた。「いつか兄を超えたい」。背中を追い、同校の門をたたいた。それまで目立った実績はなかった。ただ、入部当時から体つきはたくましかった。ひ



試合に敗れて涙するチームメイトと抱き合う長総大付高のFW安藤選手(右)
＝浦和駒場スタジアム(濱崎武撮影)

た向きに練習する姿勢、鍛えられたフィジカルを生かして突破する力を買ひ、小嶺監督は起用し続けた。才能は次第に開花し、17歳以下(U-17)の日本代表にも選ばれた。

大会屈指の点取り屋にして、守備でも体を張る。今大会は初戦で中京大(愛知)に3-0で快勝し、3年前に翼さんの代が敗れた相手に雪辱した。続く2、3回戦もゴールを決めたが、この2試合とともにイエローカードを受けた。

この日は試合前に「信じているから勝てよ」と仲間を激励。試合中も声をからした。高校日本一の夢はかなわなかったが、憧れの先輩たちを超える歴史をつくった。ピッチから泣きながら戻ってくるチームメイトを笑顔で迎えた。卒業後はJ1・C大阪に入る。「プロとして生きていく。結果が求められる。負けじとプレーして自分の価値を出していきたい」。最高の仲間と過ごした日々を胸に、新たなステージへ旅立つ。

(中島崇雄)

「仲間へ感謝」 夢追った3年間

だが、昨年の全国高校選手権は無得点。2回戦でPKを外して敗退し「自分のせい」